

## シンポジウム：教材としての杜甫の詩

総合司会・統括：三上英司（山形大学）

パネリスト：

うしおだひさし

潮田 央（神奈川県立総合教育センター）：

高等学校「言語文化」「古典探究」における杜甫詩を扱った実践

高芝 麻子（横浜国立大学）：杜甫の近体詩

大橋 賢一（北海道教育大学旭川校）：杜甫の古体詩

シンポジウムの主旨：

これまで校種を問わず、国語科において、杜甫の詩は古典教材として利用されてきた。中学校では「絶句」「春望」が、高等学校ではこれら近体詩に加えて「石壕吏」「兵車行」などの古体詩が教材となっている。それだけ、杜詩は国語教材に耐えうる古典としての要素をもっているのだろう。

しかし「思考力・判断力・表現力」が重視される中で、従来型の「杜甫を教材としてどう教えることができるか」という方針で教材案を考えるのではなく、「杜甫で何を教えることができるか」といった教材案を考える時期に来ているのではなかろうか。「杜甫詩への理解を深める」ところから一歩踏み込んで、「学校現場で杜甫詩を教える先に何があるのか」を、本シンポジウムにおいて提起することで、今後の教材としての杜詩の可能性をフロアのみなさんと共に考えてみたい。

### 【パネリストの発表概要】

#### I 潮田央：

従来の学習指導要領を整理した上で、言語文化・古典探究の中で杜詩がどのように扱われているかについて報告する。また杜詩の、教材としての長所・短所について私見を述べる。

#### II 高芝麻子：

「春望」を中心に、杜甫の近体詩がもつ教材としての可能性について論じ、比較教材を用いた発展的な授業案を提示することで、杜詩が「思考力・判断力・表現力」を向上させるために有効であることを示すつもりでいる。

#### III 大橋賢一：

主に、現行の「古典探究」で教材化されている「石壕吏」「兵車行」を取り上げ、戦争教材としての杜詩の可能性を考えてみたい。また、比較教材を用いた発展的な授業案を併せて提示し、国語の教材、言語教材としての杜詩の有効性について、私見を述べたい。